

最優秀賞

## あの一枚の写真から

鹿児島県 鹿児島市立広木小学校六年 原田 紗寧

写真に映る母は、シワシワで真っ赤な小さいサルみたいな赤ちゃんを見つめ、泣いていた。

私が生まれたのは、沖永良部島。母の実家がある、海に囲まれた小さな島だ。その島には、赤ちゃんを産める産科の病院がなく、私を産む時に、母はとても不安で大変だったことを、一枚の写真を見ながら話してくれた。

私が産まれる予定月は九月。たくさん台風が次々とやってきて、雨や風が強く、停電する日もあったそうだ。

「まだでてきちゃだめよ。」

台風で産科の先生が来られず、母はおなかの私に、何度もこう伝えたそうだ。けれど、母の願いを聞かず、風の音がゴウゴウと鳴る中、出産が始まった。私の体重は推定三千二百グラム。とても大きく成長していた様で、身長が百五十七センチもない、小さな体の母からは出られないだろうと言われ、てい

切開というおなかを切って私を出す手術が必要だったそうだ。

「えっ、産科の先生がいないのに、私どうやって産まれたの。」

ドキドキして不安になり、ギュッとにぎる写真が汗でシワクチャになっていた。台風で、飛行機もヘリコプターも飛べない。産科の先生が来るまで、島の先生が電話で指示をもらい、出産をおくらせる注射を打ったり、祖母がこしをさすって痛みをやわらげたりしていたそうだ。母はその間、

「えらい子、強い子、もう少し待ってね。」

と言い続けた。台風が過ぎ去り、産科の先生が飛行機でかけつけ、手術が始まった。ずっと痛みをがまんしていた母は、産科の先生を見ると安心し、そのまま気を失ったらしい。

「原田さん、かわいい女の子だよ。」

そう言われ目を開けると、三千二百六十六グラム

で産まれた大きな私を、だきしめていた。私を見たしゅん間、母は、

「すぐ出してあげられずごめんね。」

と謝ったそうだ。その時の写真があの一枚の写真だ。私は、母の「ごめんね」という言葉に、むねがギュッとなった。長い時間痛い思いをして、不安だっただろうな、こわかっただろうな、そう思ったからだ。そんな母へ、感謝の気持ちをこめて手紙を送る。

「お母さん、命がけて生んでくれたあの日から、私は十二回目のたん生日をむかえます。いつも、わがまま言って困らせてごめんね。お母さんがどれだけ大変な思いをして産んでくれたか、あの話を聞いたとき、本当にうれしかったよ。私は、沖永良部島で産まれたことが自慢です。お母さん、私を産んでくれてありがとう。大好きだよ。」

あの一枚の写真から、母の強さを知った。そして、今ここに生きていることが、何よりの奇せきなんだと気づいた。これからもその奇せきを大切に、生きていく。

